

お互いの力でまちづくり

③

日本ふるさと塾主宰・萩原茂裕

「こういうまちをつくりたい」「こんなまちにしたい」という目標が決まっても、「この指とまれ」では、まちづくりは進みません。そこに住む人々の気持ち、一つになつて高揚しなければなりません。

それには、みんなが同じ土俵に上がることです。住民の一人ひとりそれぞれ主義主張が違い、価値観が違い、立場が違います。

しかし、それを超えて「まちづくり」という具体的な目標に向かって、同じ土俵に上がつて汗を流すことができるかどうか、ここが分かれ目です。たとえば、同じ話を聞いても、ただでんでんばらばらに、自分の意見がなりたてるのではなく、そのベースには、

同じ土俵にあがったか

このまちをよくしようという一点で通じ合っているかどうかなのです。

主義主張の 違いを超えて 気持ちを一つに

北前船が全国各地に海産物を運び、「江差の春は江戸にもない」といわれ、にしん御殿が建ち並びました。

ところが、にしん漁が振るわなくなり、江差の町は、その後、衰退の一途をたどりました。

「なんとかしなければならぬ」と町の若者たちは考え、

百人もの人が集まりました。

勉強会の名前を、「江差地域大学」とし、一流の講師を呼んで、真剣に話を聞き、まちづくりのための模索を続けました。つまり、みんなが同じ土俵に上がったのです。

若者の熱意が町を変えた

六年前のことです。関西の

造船会社が、往時の北前船を再現し、兵庫県の博物館に寄贈することになりました。

「北前船は、おれたちの祖先がつくった船だ」

江差の若者たちは、この造船会社を説得し、とうとう北前船を日本海に航海させるイベントを成功させました。

これがきっかけとなって、江差とソ連のナホトカ間のヨットレースが行われ、さらに、隠岐島・佐渡島・奥尻島を結ぶヨットレースに発展しました。

この動きに注目した北海道庁が乗り出し、四年前には、素晴らしいヨットハーバーも誕生しました。そして、平成元年の国体のヨット競技の会場にまでなったのです。

海の男たちが、まちづくりという同じ土俵に上がり、心を一つにしたからです。

勉強会を開いて

まちづくりを模索

北海道の松前半島にある江差町は、人口一万人足らずの小さな町です。民謡の「江差追分」でおなじみですが、その昔は、にしん漁でたいへん栄えました。江戸時代には、

そのためには「みんなが同じ土俵に上がらなくてはだめだ。まず、勉強会をすることから始めよう」と、有志の若者が呼びかけました。いまから十二年前のことです。

会費は一万円としました。当初は、三十人も集まればと思っていたところ、なんと五

